梓川公民館報

氷室探訪

氷室の五社神社ののぼり旗についてご紹介したいと思います。こののぼり旗は明治の書家秋山白巖（あきやまはくがん）（一八六四～一九五四）の書で、筆太な楷書で「徳澤若春風　威稜如秋霜」と書かれています。

秋山白巖は慶応元年江戸で秋山義隆の次男に生まれ、本名を純、通称は隆道。白巖のほか別号に探淵、碧城があります。書は初め巻鴎洲に学び、後、巻菱湖（幕末の三筆と言われた有名な書家）の内弟子となりました。明治19年渡清して徐三庚（中国清末の書家）に師事し、帰国後は日本各地に書塾を開き書の普及に努めました。当時は大字の毛筆の名手としても知られ各地でのぼり旗などに毛筆を残しました。大正３年から松本市で暮らし、秋山書塾を開設して子弟の育成にあたり、松本・安曇野に様々な作品が残っていて、深志神社にも白巖の書いた碑があります。２０１４年には松本市美術館で「生誕１５０年記念秋山白巖展」が開催されました。

▲秋山白巖のぼり旗（氷室）

五社神社ののぼり旗は、当初のもの（昭和３年に書かれた）が痛んできたので平成22年に複製されたものですが、その堂々とした力強い文字には深く感銘を受けます。コロナ収束後、五社神社の祭礼の折には是非とも青空にたなびく勇壮なのぼり旗を見ていただければと思います。

梓川橋の経歴

大正12年から存在する橋、通称「丸田橋」。今年８月12日からの大雨による橋脚の全面洗堀のため通行止めとなったことをご存じの方も多いのではないでしょうか。

丸田橋は過去何回にもわたり増水による決壊、流出があり、復旧工事を繰り返してきました。度重なる被害を受けたのを機に、木橋から永久橋に架け替えるため昭和33年、梓川永久橋架替期成同盟が発足。39年３月には六区間連続鋼板桁橋が完成しました。その後、昭和58年の集中豪雨により決壊する被害がありましたが、復旧工事を経て現在に至っています。

色々な人達の重要路線として利用されている梓川橋。これからも大切に維持され続けることを願います。

◀梓川橋橋脚応急工事

梓川の世帯数・人口

世帯数	4,742戸
人口	12,488人
男	6,161人
女	6,327人

（令和３年.11.1現在）

梓川アカデミア館探訪

「第21回信州梓川賞展」作品募集

信州梓川賞展は２００１年から開催し、今年で21回目を迎える絵画の公募展です。地域の芸術文化の振興を図り、ふるさとへの愛着を深めることを目的として始まったこの公募展は、毎年ご好評をいただき、市内のみならず県外からも多数ご応募もいただいています。テーマは松本市梓川周辺地域の風土や自然、暮らしなどを描いた絵画や版画で、最高賞の「梓川賞」作品はアカデミア館の収蔵作品として保管されます。応募作品は、日常の「何気ない風景」が「特別な風景」となるような、想いのつまった作品ばかりです。私たちの生活に寄り添うふるさとの光景が、それぞれの芸術作品となり、多くの人々の心を癒し、惹きつけています。是非この機会にあなただけの「梓川」を描いてみませんか？応募期間は令和３年12月１日（水）から12月12日（日）まで。詳しい内容についてはアカデミア館へお問い合わせください。（78-5000）

NICE GUY

消防団は町会の地理などの情報を熟知

皆さんは町会内のどこに消火栓があるか知っていますか。火災のときは消火栓に頼らなくてはなりませんが、ホースとかは大丈夫？

消火や救助活動を安全で迅速に行うためには、地元の消火栓や地理などの情報が必要です。消防団は、町会と協力してホースの更新や保管状況の確認、大雪が降れば掘り出すなどをしています。過去に災害が発生した場所や、何処の沢、用水路があふれたなど、危険個所の情報を熟知しています。

降旗38分団長は「住民の生命と財産を守るため、各種訓練や消防機材の点検をしています。活動する団員が少ないと火災出動時の人数も少なくなってしまいます。また、様々な伝承もできなくなります。私たちと一緒に活動する消防団員の入団が、早急に必要です」と話していました。

地域を熟知し、火災などに備えて訓練を重ねることで私たちを守ってくれている。地域の頼れる消防団員が増える方策を皆で考えましょう。

消防団員募集中　松本市消防防災課（３３-１１９１）

▲消防機材の点検

信濃国府と梓弓

第三回の「梓の木について学ぶ市民講演会」が10月9日に梓川公民館で開催されました。講師は梓弓研究会副会長の小松千晃（ゆきあき）さんで、今回の講演では「梓弓献上を管理した国府の所在地」に焦点が当てられました。小松氏の大学での専門は歴史で、伝承をうのみにしない学究的な手法に基づく研究成果を発表されました。「信濃の国府は８世紀末頃に小県郡から筑摩郡に移された」が通説ですが、筑摩郡での所在地として、今までに（松本市）「大村」「総社」「筑摩」「深志（丸の内）」が推定されています。小松氏はこれらの根拠を古文書の記載などと照合して検証し、最終的には新たな候補として松本市「県」を推測し、その区域（６５０メートル四方）を地図で具体的に示しています。どの推定地にも遺構や遺物の発見などの決定的な証拠は見つかっていないので、郷土歴史ファンにとり楽しい謎解きのテーマとなりそうです。梓弓研究会の今後の活動に期待しています。

七日山の石仏群

小室諏訪神社の境内に金毘羅様が祀られており、参道には梓川では唯一の石仏群をみることができます。

こちらに移り住んですぐのころ、近くの神社へごあいさつでもと伺った折に出会ったのが、ひっそりと佇んでいたこの石仏群でした。

案内版によると、88体の石仏が建てられてから１８０年近くのときを経ていることになりますが、今でも当時の朱色や、刻まれた文字がはっきり残っているものも多くみられます。

久しぶりに訪れ、本当にひっそりとした参道を辿っていると、名前とおぼしきところに「母」と刻まれた石仏をみつけました。病気や苦しみから救われることを願った、それぞれの石仏に、いつの時代も変わることない深い祈りや願いが込められていることを感じます。

ところで、この石仏は本当に88体なのか、気になって数えてみました。

その結果は・・・おや？

▲七日山の石仏群（小室）

コロナ下の秋葉社例祭

秋葉社の本宮は浜松市の秋葉山本宮秋葉神社で、火伏せの神の秋葉大権現を祀っています。秋葉社の氏子は立田両区で、例祭の神事は山田宮司（大宮熟田神社）により、例年通り9月18日に宵祭り19日に本祭りが斎行されました。

秋葉社の鳥居は梓支所の北側を通る県道２７８号（大野田梓橋停車場線）から大久保地区に上る坂の入り口の北側の広場（通称：下の段）の入り口にあります。階段を上がった段丘上に拝殿と本殿（上の段）があります。

秋葉社は宝暦十年（１７６０年）創建以降、立田の氏子の信仰を集め、高度成長期前の例祭では下の段に舞台を設営するなど盛大な秋祭りでした。立田の氏子総代は大宮と秋葉社の総代を兼ねており、通常なら立田両区の本当番組と受当番組と共に例祭を行いますが、今年の例祭はコロナ対策として山田宮司と立田両区の総代のみで行いました。コロナが下火になりましたら、大火を防ぐ後利益を期待して例年通りの例祭が斎行出来る事を願っています。

梓川公民館の応援隊

シルバー人材センター梓班の岩崎栄一班長と18人の会員さんが、日ごろ地域の交流の場となっている梓川公民館を、利用者の皆さんに気持ちよく使っていただきたいと、10月4日早朝から除草の奉仕活動が行われ、公民館周辺がきれいに整備されました。

▲頼もしい応援隊

雑記帳

昨年庭のもみじにモズが巣を作った。モズはスズメより一回り大きく見た目はとてもかわいらしい鳥だが、猛禽類（もうきんるい）と同じく肉食系で昆虫やカエルなどを餌としている。秋になると木の枝に刺されたイナゴやカエルが見られ、ネズミが挟まれていたこともあった。これは「モズの早贄（はやにえ）」と言って、冬の餌のないときにこれを食べるとされている。そんなモズの成長を楽しみに見ていたが、ある日、巣の中を見ると親鳥よりもかなり大きな鳥がいるので驚いた。調べるとなんとその鳥はカッコウで、これはカッコウの「托卵（たくらん）」だと分かった。托卵とは卵の世話を他の個体に託すことだそうだ。聞いたことはあったが、いつの間に…。それでも見ているとモズはせっせと餌を持ってくる。自分より大きなカッコウに餌を与え、最後まで自分の子と思い育てるモズを見るにつれ、自然界の厳しさを思い知らされるとともに、嬉しいような悲しいような複雑な思いにさせられた。ちなみに今年は自分の子を育てている姿が見られ安堵した。

▲左モズ、右カッコウ